

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松義人

印刷所：SRS株式会社

定 価：一部30円

2012年3月20日

第 347 号

自助・共助・公助

理事長 稲松 義人

生活上の課題を解決するためのレベルとして、「自助・共助・公助」ということを聞くことがある。3つ並べると語呂がいいが、実際にはどうなのだろうかと疑問に思う。何ごとにもまず自助努力は大切なだろう。しかし、福祉の現場にいくと、基本的には自分で解決できないから支援を求めていられているのであって、多くの場合、自分で何とかしなさいとは言いがたい。でも時々、こんなことまで施設が対応するの？と思わされることもある。自分で解決できないときは公的な福祉サービスを利用するということになる、共助とはいったい何だろう。たぶんそれは、公的な福祉サービスではないところで助け合っているというところなのだろうと思う。

昨年来、東日本大震災の経験を受けて、「絆」とか「つながり」とか「助け合い」という言葉をよく聞いた。欧米の人たちから、日本の社会は今も「人と人のつながりのチカラ」を失っていないと称賛されたという話を聞いた。耳慣れない言葉でいうと「ソーシャルキャピタル」(社会関係資本と訳される)ということなのだろうか。

小羊学園でも、浜松市内の何か所かで、障がいのある子どもたちの放課後支援をしている。学童保育といった方が分りやすいだろうか。お母さんが働いている等で子どもたちに十分な保育ができないときに代わって見てくれる施設が「保育所」であり、小学生になってもやはり大人の目配りが必要だということ。昔に比べると隣近所で見てもらうことが難しくなってきたからかも知れない。働くお母さんが昔に比べると圧倒的に増えたこともあるだろう。ともかく、そんな環境の変化の中で、放課後支援への潜在的なニーズは計り知れない。障がいのある子どもでもそうであるなら、障がいのある子の場合さらに支援が必要である。それは中学になっても、高校になっても、あるいは卒業して作業所などに通うことになっても、生活を支えてくれる家族たちが家庭にもどって来るまでの時間の支援はなくてはならない。

新年度より、障がい児支援のメニューとして「放課後等デイサービス」が制度化される。明確に「放課後支援」を目的とした障がい児施策は初めてである。しかし、個人や家族内では対応しきれないところを、公的な仕組みの中で支えようと考えると、これまでの福祉施策と変わらぬ。そこには公的資金が投入される。施設を運営する私のような立場からすると、明確な枠組みが

示されたということになるのだが、公平性と効率性が求められる、考え方を変えたとそれぞれに様々な事情がある子どもたちとその家庭に対して、示された枠組みに縛られて、どうしても一律の支援をすることになるだろう。

「老老介護」は、一つの家庭の中のこととして、自助の範囲で考えると辛いイメージがする。しかし、限界集落と言われるような高齢化率の高い山村であっても、助け合って暮らしている老人たちの姿はたくましい。不慣れた地域が多いので、インフラ整備という面では大いに問題があるが、助け合って生きるという意味では、豊かさがあるのではないだろうか。放課後の子どもたちも子どもたち同士で楽しく遊び、成長できる地域社会をつくっていかなければならぬと思っている。

多くの社会福祉法人は、施設を営営し運営することを目的としている。一般的には、多くの施設を営営する法人が評価されるであろうか。民間の施設であっても、当然、公的な制度の枠の中にある。介護保険にしても、自立支援給付費にしても公的資金である。これからの社会を考えると、「共助」のある地域社会をつくっていかなくてはならないのではないかと思う。しかし、共助の社会をつくっていく努力は、施設経営から見ると収入を減らすための努力になるのだろうか。あれこれと小羊学園の未来を思い巡らしている。

小羊学園 研究発表会 優秀賞受賞研究

「ミチノリさんの行動の変化から考えられること」
 ～ケアホームでの生活を通して～

あゆみホーム 川人 由美子

1 ケース概要

ミチノリさん 男性(40歳) 重度精神遅滞 障害区分(5) てんかん(ヘッドギア着用)
 性格…おだやかで明るい性格。
 行動…周囲の状況をみながらゆっくり行動する。

ADL…一部(全介助) 生活歴…中学3年12月まで家庭生活を送る。

1986年1月(14歳) 小羊学園入所
 2004年4月 あゆみホームに移動。
 (33歳) 現在に至る。

2 事例を挙げた理由

ミチノリさんはケアホームでの生活が7年目になる。ここ数年で自分の訴えを行動や表情で表すことが増えてきた。なぜ訴えを表出できるようになったのか、なにか変化があったのか表面的な表れだけでなくその根拠を探り、今後の支援に結び付けたいと考える。

3 実践と経過

まず本人がどういう方だったのか、

どの地点でどのような変化があったのかなどを知る為、入所当初からケアホームに移るまでと移った当初の本人の様子や支援内容の変化について、児童寮当時のケース担当やベテラン職員にアンケート・聴きとり調査を主に、時系列に整理した。

本人の印象(様子)の変化

ミチノリさんは入所当初オドオドとした表情で大声をきくとビクビクしていた。対人緊張が強いのは家庭での養育環境が影響していると考えられた。男性職員が怖くオドオドしており消極的という印象が強いが、自分の好きなもの(人)にはとても積極的で、散歩中傍を好きな車がゆっくり走っているとそれについて行ったり、同じグループのTさんが大好きでいつも寄り添いニコニコと良い表情をしていた。

日中で発作も少なくしばらくはのびのびと生活していたが、発作が多くなりヘッドギアを付け始めて固い表情が増えていった。児童寮で生活するうちに背後からの恐怖がない場所(壁を背にした位置)を好んで過ごすようになった。

り、ADLでは朝方室内で排便していたのが、トイレで排便できるようになった。自活訓練でケアホームに移ると環境の変化からか、一時的に対人緊張が強く出るようになったが、時間の経過とともに徐々に慣れ、表情も穏やかになっていった。本人からのアプローチはなかったが、周囲の様子はよく見ている人だった。

現在は、オドオドとした表情はほとんどみられず「いひひひ」と声を出して笑ったり、1日中にやにやとしている日もよくみられる。

また、背中を壁につけて過ごすことはほとんどなくなり、ソファでリラックスしたり、職員の傍に来て一緒にす



ごしたり、他の利用者と川の字になって寝そべっていたり、そのまま居眠りすることもある位、自然体で暮らすようになってきている。

環境面の変化

ミチノリさんは児童寮では広い大きな空間で多くの利用者と一緒に暮らしていた。他の利用者との共同生活により、いつでも彼のペースで過ごすというのが難しい環境だった。自活訓練でケアホームに移ると、一般家庭の広さになり、生活用品が手の届くところにたくさんあり、冷蔵庫も自由に開閉できる環境が変わった。

支援面での変化

児童寮時代は、本人がまだ若かったということもあり、経験不足を補う意味で職員が本人に色々体験をさせていた。また本人の可能性を広げるために、課題を与えて頑張ってもらおうという支援をしていた。どちらにしても本人の性格を尊重しながらも、引っ張りあげていたの周りから見ると厳しく見えたかも知れない。当時、職員側は支援してあげているという視点で接していた。

(参考…ミチノリさんのグループは午前に細江の作業所まで5〜6キロを歩いて通い、午後は眼串(竹の釘)を作る作業をしており、本人は竹を割る担

当だった。)

また、ミチノリさんは促したり一緒にやるとできるので、例えば衣服の着脱の際、職員の声かけに本人が動くことができないでいると職員は『わかっているのにやろうとしない』との見方になりがちで、その内強い口調の職員に圧倒され、発作を引き起こし、何の進展もなく終わってしまうというように、本人の能力以上の期待が大きくなり、厳しかったようだった。

自活訓練でケアホームに移ってから、ケアホームとはどういうものなのかと職員が模索しており、最初は児童寮での支援を継続していた。

現在は年齢も考慮し、今できていることはできる限りやってもらうよう励ましたり認めたりしながら、こちらの思いだけで支援をするのではなく、本人がどう思っているのか、どうしたいのか観察したり尋ねたりする中で本人の気持ちを探りながら支援するようにしている。

以上のようにケアホームで暮らすようになって、集団↓少人数、職員主体↓利用者主体という環境や支援内容の変化に伴い、消極的・受け身的な印象の強かったミチノリさんが、だんだん自分の要求を訴えるようになってきた。

今年度特によくみられるようになったのが、職員が本人の横を通ったとき素早く職員の腕をつかみ、又は職員に自ら近付き、手を引いて冷蔵庫やラジ

カセに連れて行き要求を訴えるという行動である。また他の利用者のすることを真似て食器棚からコップを出して飲み物を要求するという行動もみられてきた。

具体的な変化について調べる為に、実際の本人の訴えの表れ方や頻度、職員の対応などについて記録方法を改良し、本人からの要求行動を調査してみた。

実践の結果1

自分の気持ちが理解されているという手ごたえからか要求の回数は多くなり、対人緊張が強いという内面を持った方なのに、あゆみ担当職員だけでなく、あまり入らない職員にも訴えていることがわかった。訴える手段としては職員の手を引いて目的の所へ連れて行くという行動が中心だがアイコンタクト・対象物を自分で触って知らせることも多くなり、実践前に比べると意欲的に行動しそのスピードも速くなってきた。

要求表現を観察していく中でトイレや音楽のようにはっきりした要求以外で、職員の後ろに來てじっとしていることが何度かみられた。その行動の意味や要求内容はなにか、次の実践で取り組んで、さらに本人の気持ちを探索為に深く観察していくことにした。

最初の実践内容に次の対応を加え、本人の気持ちを引き出していくための方法として、まなざしだけや職員の近



くに來るだけの行為にも「どうしたの」などと本人からの要求が出やすい声かけをして、待つことを大切にしながら観察していった。

実践の結果2

見つめるだけの行動の多くは、声をかけても要求行動に移さなかった。しかし要求がなかったともいえず、前後の状況から本人の気持ちや行動の意味を推測する中で、本人の立場に立ってより深く考えるようになっていった。

具体的な要求はつかめなかったが、本人の思いに寄り添うという姿勢に自然

になっていたのではないだろうか。

4 評価

実践の評価として、ミチノリさんは入所施設からケアホームに移ったことで落ち着いた生活空間や人間関係などの環境の変化があり、要求を訴え易くなった。そしてミチノリさんからの訴えがあった時に最後までちゃんと応える(付き合う)ことを繰り返すことで自分の要求を受け入れてもらえると感じ、気持ちを行動に移すようになった。さらに生活を続けていく中で生活のいろんな場面で意欲的になるのがみえてきた。職員も行動の意味を考えることで本人の気持ちを考える姿勢が更になくなったと考えられる。

5 考察

私たち支援員は日常の支援の中で、気持ちを上手く表現できない重度知的障害者の意思を引き出すこと、受容することの難しさを感じるが多い。今回の事例では、施設からケアホームに移行する中で、環境と支援の相互がバランスよく改善された結果、本人からの訴えが増え、生活が充実の方向に進んだのではないだろうか。ケアホームという生活環境をただ提供するだけでなく、本人の気持ちに寄り添う、思いを引き出すということを常に意識して支援することが私たち支援員に求められる大切なことだと感じた。



3月2日～4日に浜松駅周辺の市街地で行なわれた「花・緑タウンフェア in 浜松2012」において、県立農林大学校が『まちなか花の地上絵』を制作しました。作品展示後に育てた花の苗を社会に有効活用したいとお話があり、小羊学園として800本の苗を頂くことになりました。

3月12日に県立農林大学校の鈴木先生と学生2名がお越しください、パンジーなど6種類の色鮮やかな花の苗をいただきました。早速、各事業所に配り、利用者と一緒に花壇やプランターに植えました。

ぐつと春が近づきました
花の苗800本を頂く



小羊学園 創立感謝祭

記念講演会・シンポジウム

主催：社会福祉法人小羊学園 後援：聖隷歴史資料館

日時 2012年4月28日(土) 14時～

記念礼拝と祝会(昼食)

11時～13時30分 三方原スクエアにて

第1部 記念講演会・シンポジウム(参加費無料)

14時～16時30分 聖隷クリストファー大学1701教室

講演 「山浦俊治はなぜ小羊学園をはじめたか」

講師 長谷川 力氏 (元聖隷福祉事業団理事長)

シンポジウム「小羊学園における障がい児福祉の歩み」

支援のスタイルは変わっても小羊学園が継承すべきスピリットは何か。

登壇者 戸田 武氏 (元小羊学園児童寮施設長)

渡辺禎子氏 (元小羊学園青年寮施設長)

山崎陽司 (三方原スクエア施設長)

進行 稲松義人 (理事長・放課後サポートセンタードルチェ施設長)

第2部 懇親会

講演会終了後(17時頃～19時頃) 三方原スクエアにて

立食形式の自由な懇親会です。参加費2千円(小学生千円・幼児無料)

○参加申込み

旧職員、関係者等には案内を郵送します。FAXにてお申込み下さい。

ご支援者等、個人でご希望の方はスクエア内準備委員宛にお電話を下さい。

三方原スクエア ☎ 053-414-1833

小羊学園を支える会

2011年度寄付金報告

2月受付分 1,172,204円 (31件)
累計 7,598,340円 (417件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局(鈴木)
三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

編集後記

今年の創立感謝祭では記念講演会・シンポジウムを行う計画が進んでいる。時代が変わり新しい福祉の考えや制度変更がされる中で、根幹である小羊学園の理念の継承が大切だと考える。制度も財政も乏しい中で始まった重度障害児施設の運営は、今の時代ではあり得ない状況下であったであろう。山浦初代理事長をはじめ諸先輩方が熱い眼差しで立ち向かった障害児支援とほとんどんなものだったのか再確認し、これから先の福祉観を見つめ直す良い機会になればと期待している。

春の気配が感じられる頃ですが、まだ花冷えもあります。どうぞお身体ご自愛下さい。

(F)